

徒然なるままに…21

— 第2回教科研究会を終えて… —



平成26年10月27日
白鳥小学校 研修部

朝夕の冷え込みや少しずつ色付きつつある木々に、秋の深まりを感じる頃となりました。先生方は、それぞれの秋を楽しんでおられることでしょうか。ぜひ、多き「実りの秋」といきたいところですが…。



さて、第2回教科研究会を無事終えることができました。まさに、学校全体で催すことのできた会となりました。授業された先生方、細部にわたって気を配りながら運営してくださった先生方、本当にお世話になりました。

授業公開から感じたことは、本校らしさの一端を発信できたことです。考えを練り合いながら、意欲的に学習する子ども、問いと思考にこだわった授業、一人一人持ち味のある先生方と、本校ならではの「学び合いのある授業」を展開することができたのではないのでしょうか。これは、先生方お一人ずつがこだわりを持ち、先生方にしかできない授業づくり目指しておられるからだだと思います。授業は、「型」ではありません。教材も授業スタイルも板書も、こうでなければならないものでも決まり切ったものでないのです。



今回、文部科学省 澤井陽介先生が授業参観と講話をしてくださいました。澤井先生の講話から、私が考えたこととお話しようと思います。

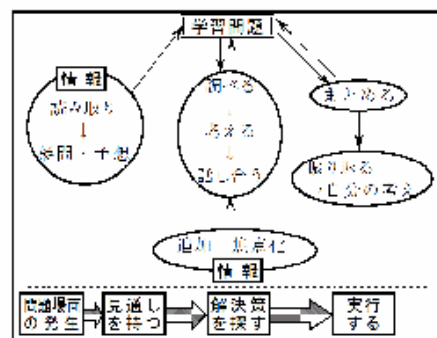
一つ目は、問題解決の思考過程を意識した授業構成です。澤井先生は、

- ① 事実・データから、追究したくなる問いを設定する。
- ② 予想に沿って学習計画を立てる。
- ③ 発表や話し合いの言語活動を通して、情報から社会的事象の特色や意味を考える。
- ④ 追究を振り返り、自分の考えを持つ。

という授業展開を示されました。これは、

- ① 疑問から、「問いの追究」という問題場面が生じる。
- ② 解決策の見当を付け、考える見通しを持つ。
- ③ 疑問を解消する策(問いの答え)を探す。
- ④ 解決策を実行する。(自分の考えを持つ。)

という問題解決思考に裏打ちされたものと考えられます。これを図示すると、〈資料1〉になります。これによって、子どもの思考に沿った、主体的な問題解決を展開することにつながると考えられます。

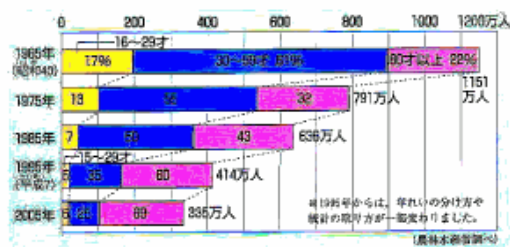


〈資料1:問題解決の思考過程を意識した授業構成〉

二つ目は、子どもの「学び合い」・意見交流の意味です。澤井先生は、投票率の推移のグラフに対する子どもの気づきを例に、「気づきのつなぎ合い」を挙げられました。これ

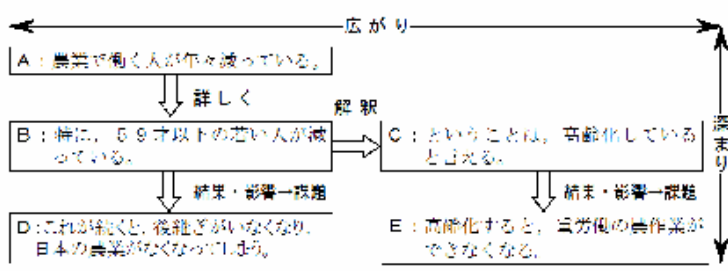
が子ども相互の考えの練り上げです。

例えば、5年の農業の学習において、〈資料2-1〉から、〈資料2-2〉のような五つの気づきが挙がりました。Bは、減り方の特徴を示し、Aの発言を詳しくしています。Cは、減り方の特徴をさらに言い換え、解釈を加えて広げています。Dは、Bが気付いたことから起こる課題を見出しています。Eは、Cが気付いたことから起こる、Dとは別の課題を見出しています。このように、言い換えたり、続きを言ったり、まとめていったりすることによって、子ども相互に気づきや



〈資料2-1: 農業就業者の推移〉

考えを積み重ねることによって、子どもの思考・認識を広げたり、深めたりすることになるのです。ここに、子ども相互に意見交流する「学び合い」のある授業の意義があるのだと思います。



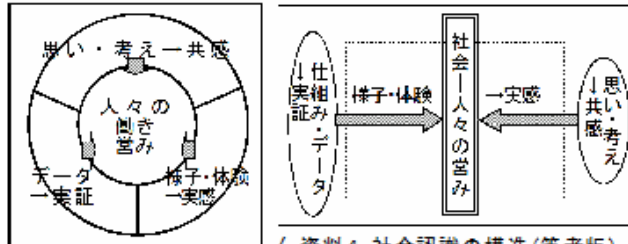
〈資料2-2: 子どもの発言のつながり〉



とすると、子どもにこのように思考し、発言できる素地を付けておく必要があります。そのためには、気づきや考えをつなぐ意識を持たせる、「言い換えるとどうなる。」「つなげて言えることはないか。」などと、気づきや考えをつなぐ発問をする、つながる発言をした子どもの意見を取り上げ、指摘・評価するなどというように、スモールステップで継続的に指導していく必要があるでしょう。

ちなみに…横浜国立大学 高木展郎先生は、子ども相互の話し合いによる「出力型」の授業づくりを提唱されています。後日、参考資料をお配りしますので、ご一読ください。

最後に、社会認識の構造図(〈資料3〉)をメモれなかったという声が多かったので、これに少し触れておきましょう。社会を見るためには、



〈資料4: 社会認識の構造(筆者版)〉

〈資料3: 社会認識の構造〉
仕組みやデータから「実証」という方法で迫る「科学的側面」と人の思いや意図から「共感」という方法で迫る「情意的側面」の二つの側面があるということです。科学的側面に偏ると、社会をしくみや理屈のみで、情意的側面に偏ると、感情的・観念的な社会認識になってしまいます。両方を意識した単元構成が必要となります。また、観察や体験を通して、実感できる学習活動の工夫が必要となります。これによって、子どもの主体的な学習を展開することにつながるのだと思います。(〈資料4〉)



今回は、1月30日の自主公開研です。さらに、有意義な実践となるよう、よろしくお願いいたします。